

展望論文**特別活動（生徒会活動）**

—ノート検定を通じて生徒会活動の活性化を図る—

井上浩史

(同志社大学免許資格課程センター)

Special Activities (Student Council Activities): Activating Student Council Activities through Notebook Certification

Hiroshi Inoue

By the revised “Seito Sidou Teiyou (Summary of Guidance and Counseling)” (MEXT, 2022) “Student Council Activities,” one of the special activities, are deemed crucial in achieving the objectives of Student Guidance and Counseling. The “Student Council Activities,” focusing on the “Notebook Certification” initiated in public junior high schools in 2016, enabled students to create an environment where they could enjoy learning together. The “Learning Cooperation Committee” establishment further shifted the “Notebook Certification” to a student-driven initiative, contributing to the revitalization of “Student Council Activities.” Students took the initiative to propose and manage projects, fostering mutual recognition, encouragement, and support among themselves, significantly enhancing student autonomy and proactiveness, and contributing to academic improvement. In addition, amid the COVID-19 pandemic since 2020, students expressed the hope that student council initiatives, incorporating and innovatively implementing student ideas, such as the “Note Certification,” could be carried out under any conditions. Moreover, the increased number of students volunteering for student council officer roles due to their attraction to “Student Council Activities” indicates an elevation in their sense of autonomy and sovereignty.

Keywords: Student Council Activities, Initiative and Proactivity, Sense of autonomy and sovereignty

1. はじめに

2022年に改訂された「生徒指導提要」(文部科学省, 2022)では、特別活動は生徒指導の目的を達成するために重要な活動であると以下に記している。

特別活動は、生徒指導の目的である『児童生徒一人一人の個性の発見とよさや可能性の伸長と社会的資質・能力の発達を支える』ことに資

する集団活動を通して、生徒指導の目的に直接迫る学習活動であると言えます。(文部科学省, 2022, p.56)

そのため、特別活動の一つである「生徒会活動」を、生徒の自主性を尊重し、創意を生かし、目標達成の喜びを味わえる学習活動にすることは大切である。

また、児童生徒の主権者意識の向上を図る上にお

いて、「生徒会活動」が重要であると以下に記している。

児童生徒の権利を保障する視点や、生徒指導の目的・目標からも、児童生徒が自ら学校生活の充実・向上に向けて、話し合い、協力して実践する児童会・生徒会活動は、児童生徒の自治的能力や主権者としての意識を高める上で極めて重要な活動と言えます。(文部科学省, 2022, p.65)

よって、「生徒会活動」の重要性がこれまで以上に高まっていると言える。

そこで、筆者が校長として勤務した公立中学校で、2016年度より始めた「ノート検定」を中心とした「生徒会活動」が、2022年度末で7年を経過したことで、その期間をⅠ～Ⅲ期に分け、それぞれの取組内容と成果について考察する。

2. 「ノート検定」を中心とした「生徒会活動」の取組内容と成果

(1) くⅠ期(2016～17年度)～「生徒会活動」としての土台づくり～

2016年度から開始した「ノート検定」は、私自身が、公立中学校の生徒誰もが直面する現実的な課題は進路実現であると想定し、生徒主体の活動を通じて学力の向上を図ることができないかと考えたことが契機である。

「ノート検定」とは、日頃の授業をしっかりと受けノートをきちんと取ることが学力の向上につながるという考えに基づき、生徒がまとめた5教科(国語、社会、数学、理科、英語)の授業ノートやワークシートを検定(1～5級)し、優れたものを全校生徒で共有する年間5回の取組である。定期試験前1週間以内に実施することを基本とし、教科は1回の検定で2教科ずつ、1教科につき年2回行う。表1は2016年度の実施計画である。

表1 2016年度の「ノート検定」の実施計画

	5月	6月	10月	11月	3月
検定教科	国語 社会	数学 理科	英語 社会	国語 数学	理科 英語

※3月は1, 2年生のみ

2016年度は、第1回を終えた時点で、教員から「生徒会」に対し、将来の進路実現に向け、生徒同士で協力して学力の向上を目指すことを目的とする専門委員会を新たに設置することを提案した。そして、「生徒総会」で承認を得て設置されたのが、「学習協力委員会」である。その後、「生徒会」の役員改選にて、学習協力委員長が初選出され、第4回から「生徒会活動」と位置付けた「ノート検定」となった。以後、「学習協力委員会」が主体的に運営を行っている。

検定当日の進行は、全校生徒が体育館に入場し、学習協力委員の指示で整列する。委員長のあいさつ後に、学習協力委員から検定教科の勝負ページが発表される。勝負ページとは、検定するノートやワークシートの単元・教材、授業日時を教員が指定したページである。その後、生徒は指定されたページを開き、一人ずつ順に教員から検定を受ける。

2017年度の検定の評価規準は下記の通りで、年度当初に生徒に伝えており、基準をクリアした項目数に応じて級付けをする。

2017年度の評価規準

〔全教科共通〕

丁寧な字で濃く書く、授業日時やページ数を書く、「学習のめあて」を書く

〔各教科の特性〕

自主学习したことを書く(国語)

自分の予想や意見を書く(社会)

間違えた理由を書く(数学)

実験の考察理由を自分の言葉で書く(理科)

習った表現を使用したオリジナルの英作文を書く(英語)

検定終了後には、検定教科の教員の講評があり、1級の授業ノートやワークシートを大型スクリーンに拡大投影して、よりよい授業ノートやワークシートづくりのポイントを解説する。最後に、学習協力委員の代表生徒の指示で全校生徒は体育館を退場する。その後、1級の授業ノートやワークシートの一部を、教員がよかった箇所に付箋を貼りラミネート加工し、モデルノートとして各学年の廊下に掲示する。また、1年間に1級を複数回取得した生徒に対して、学習協力委員長が生徒集会(生徒会主催の全校集会)で表彰する。

〈成果〉

特に効果があったのは、生徒の日頃の授業に対する姿勢・態度で、とても主体的・積極的になった。それは、教員のヒアリングで、「これまでモノクロだった生徒のノートがカラーになった」、「学力低位の生徒がよい級を取りたいために少しでもノートを取ろうとしたりする姿が見られるようになった」、「生徒同士でノートをお互いに見せ合って助言し合う場面が教室内で見られたりする機会が増えてきた」等の声が多くあったことから伺えた。

2017年7月の生徒対象調査（2，3年生121名）では、「授業に主体的に取り組んでいますか？」に対して、「あてはまる」が45%、「ややあてはまる」が46%、合わせて肯定的回答が91%であった。3月に比べて、「あてはまる」が7ポイント上昇した。また、「友達と意見交換するのは楽しいですか？」に対して、「あてはまる」が62%、「ややあてはまる」が33%、合わせて肯定的回答が95%であった。3月に比べて、「あてはまる」が8ポイント上昇した。取組が進んでいく中で授業に対する主体性・積極性が向上していくことがわかる。

また、「生徒会活動」として位置付け、「学習協力委員会」を新たに設置したことで、学習協力委員の生徒自身に強い影響を及ぼした。それは、回を重ねる毎に委員としての自覚と責任が芽生えてくる様子が見られたことからわかる。体育館の会場準備、後片付けを率先して行う委員たちの表情には、大きな取組を運営する責任感と全校生徒に貢献する有用感が見て取れた。そして、彼らの動きと連動して、当日の体育館は、全校生徒が「自分たちが大きな取組をつくっている」という雰囲気（一体感）に包まれていった。さらに、このような委員たちの生き生きしている様子を見た周りの生徒たちが、その活動内容に魅力を感じたのか、クラスの学級委員選出の場面では学習協力委員に立候補する生徒も徐々に始まった。

このように「ノート検定」は、すべての生徒の主体性・積極性を押し上げたと言える。よって、「ノート検定」は「生徒会活動」としての土台となった。

（2）〈Ⅱ期（2018～19年度）〉～生徒と共に“進化”する「ノート検定」～

「ノート検定」開始当初は、全校生徒が落ち着いた学習に向かうことができる授業環境づくり、一人一人の生徒が自身の努力を自己評価する場面づくりを目指していたが、2年間（2016～17年度）で概ね

達成したと言える。そこで、2018年度では、教員から「学習協力委員会」に対し、活動をより充実するための創意工夫した取組案を、委員たち自身で考えるように提案した。その後、協議を重ねた結果、委員会から提案されたのが「ミニ検定」である。

「ミニ検定」とは、「ノート検定」の対策として位置付けた取組である。その内容は、検定日の1週間前から毎日、終学活（15分間）で、クラスの班内において生徒同士で検定するものである。実際は、クラスの学習協力委員（2名）が全体の進行役となり、その指示に従って班長が班員の授業ノートを検定する。ただし、勝負ページは、検定日の指定教科の授業ノートの中から、検定される生徒自らページを選択することができる。また、評価規準は、「学習協力委員会」が事前に協議して決めており、2018年度は下記の通りである。

2018年度の評価規準

- ①本日のめあてが書けている
- ②丁寧な字で授業の流れがわかるように書けている
- ③ノートを見やすくするための工夫がある（色分け・図や矢印の活用など）
- ④友達や先生の発言で必要なものをメモしている
- ⑤ふり返りを書いている

検定終了後、班長は班員に結果と理由を伝え、班内でそれぞれの改善点について意見交流する。それが、授業ノートの取り方・まとめ方を相互理解できる絶好の機会になる。上手く取れていないと感じていた生徒にとっては、「ノート検定」に備える手立てになることはもちろん、様々な創意工夫を学ぶことができる。実際、すべての班において非常に活発な意見交流が行われていた。

次に、3年目を迎え、「ノート検定」を「小中連携事業」一環として位置付けて学習方法の連続性を保持する体制を構築すれば、児童生徒自身が、将来（中学卒業時）の進路実現に向けた確かな学習方法を身に付けられ、それが、中1ギャップ（異なる環境に馴染めない等）を軽減する手立てにもなると考えた。そこで、小・中合同研修会（8月）では小・中学校の教員間で協議し、統一した評価基準による授業ノートの取り方・まとめ方の共通理解をした。そして、2019年度から各小学校で、6年生対象の「ノー

ト検定」を開始した。

しかし、成果があった反面、取組の形骸化という新たな課題も浮上してきた。そこで、実施したのが、2018年度に提案された「ミニ検定」であり、2019年度に提案された「ジャンボビンゴ」である。「ジャンボビンゴ」とは、終学活に学習規律を高めるビンゴゲームを行う班活動で、実際に行ったことで、班の生徒間交流が一段と深まり一体感が生まれ、形骸化防止につながった。

また、評価規準の見直すことが形骸化防止にもなると考え、2019年度には、学校全体の研究テーマを「筋道を立てて思考、判断し、表現する力の育成～各教科におけるノートづくりを通して～」として、教科会（同教科の教員が協議する会）で協議を重ね評価規準のレベルアップを図った。2019年度の評価規準（例：国語科）は下記の通りで、前年度に比べ、一層思考力・表現力を必要とする授業ノートやワークシートづくりが求められている。

2019年度の評価規準

- ①日付、曜日・ページ・学習のめあてを書く
- ②矢印や＝、吹き出し、図や色を利用して自分なりの工夫がある
- ③他の人の考えや調べたことなどを、メモ欄などを用いて書けている
- ④学んだことに対するふり返りができている
- ⑤ふり返りの内容が、何を、どのようにどんなふうに分かたが考えたのかが具体的に書けていて、その時間に何を学んだのかがわかる

〈成果〉

「ミニ検定」の実施で、クラス内で一人一人の生徒の学び方の違いを発見し、そのよさを認め合う関係が生まれ、生徒間交流が一段と深まった。学習協力委員にとっては、クラスの仲間に貢献できたことは大きな喜びと自信になった。「ミニ検定」、「ジャンボビンゴ」とは、生徒たちが自ら楽しく学習し合える環境を作り出し、生徒同士で協力し合って学力の向上を図る取組である。生徒の企画した取組を生徒が運営し実施することが、生徒たちの主体性・積極性を大きく促進することを多くの教員が実感した。

「生徒会活動」の活性化、言い換えれば、生徒同士で認め合い・励まし合い・支え合える関係をつくっていくことで、「ノート検定」は進化したと言える。

2019年11月の生徒対象調査（184名）では、全学

年において「授業に主体的に取り組んでいますか？」に対して、「あてはまる」が37%、「ややあてはまる」が46%、合わせて肯定的回答が83%であった。また、「友達と意見交換するのは楽しいですか？」に対して、「あてはまる」が54%、「ややあてはまる」が38%、合わせて肯定的回答が92%であった。さらに、「授業中にノートをしっかりと取る（メモする）ことで、学習の内容の理解が深まっていると感じますか？」に対して、「あてはまる」が48%、「どちらかというにあてはまる」が35%、合わせて肯定的回答が83%であった。

加えて、2019年度の「全国学力・学習状況調査」（3年生対象61名）の質問紙の回答結果によると、「授業で学んだことを、ほかの学習に生かしていますか？」に対して、「あてはまる」「どちらかというにあてはまる」を合わせた肯定的回答率は、全国および京都府の平均より高い結果が得られた。実際に、教員のヒアリングでは、「教科以外の学習場面で、生徒が自分自身で考えたことを文章化する際、ノートを利用してこれまでに得た知識をつなぎ合わせようとしている姿を見かけた」、「発表する際、どのように表現すればわかりやすく伝えることができるかについて、ノートに書き留めていたことを参考に考えている姿を見る機会がとて増えてきた」等の声が多く聞かれた。

（3）〈Ⅲ期（2020～22年度）〉～生徒と共に“深化”する「ノート検定」～

2019年度末からの「新型コロナウイルス感染症」の感染拡大に伴って休校、分散登校、学級閉鎖等が重なり、2020年度は、教育活動（授業、部活動、学校行事等）が大きく制限される事態となり、「ノート検定」の実施も当然危ぶまれた。そこで、これまでの「生徒会活動」としての成果を踏まえ、実施の有無については委員たちと教員で十分に協議して判断する必要があると考えた。そして、協議の結果、創意工夫した「ノート検定」が提案され、実施することとなった。

方法として、教室前の廊下で検定を行うこととし、教室前廊下には検定する教員が配置され、生徒は一人一人順に廊下に出て検定を受ける形態とした。また、教室内の待機の生徒たちは、「学習協力委員会」の提案で、事前に委員が作成した学習プリントが配布されて各自で取り組むこととした。その答え合わせについては、解答と解説の動画を事前に「学習協力委員会」が収録し、それを検定終了後に教室で視

聴することとした。動画の登場者は委員だけである。彼らは動画にネーミング(770チャンネル)するほど気持ちを入れ込んでおり、改めて生徒主体の取組であることが伺える。

このように、コロナ禍の厳しい環境にもかかわらず、生徒からの提案を十分に生かして途切れることなく、2020年度、2021年度も継続して実施した。2022年度には、新たな取組「ワードクイズ」が提案された。その内容は、学習に対する興味・関心を持つことを目的とし、「学習協力委員会」が作成した学習クイズを廊下や階段の壁面に掲示する。そして、正解者には「図書委員会」作成の葉を贈呈するものである。複数の専門委員会に跨り一緒に主体的に活動するというのは生徒ならではの柔軟な発想であると言える。

〈成果〉

2021年6月の生徒対象調査(211名)では、全学年で「授業に主体的に取り組んでいますか?」に対して、「あてはまる」が31%、「ややあてはまる」が48%、合わせて肯定的回答が79%であった。また、「友達と意見交換するのは楽しいですか?」に対して、「あてはまる」が49%、「ややあてはまる」が40%、合わせて肯定的回答が89%であった。その半年後の調査では、全学年で「授業に主体的に取り組んでいますか?」に対して、「あてはまる」が25%、「ややあてはまる」が55%、合わせて肯定的回答が80%であった。また、「友達と意見交換するのは楽しいですか?」に対し、「あてはまる」が43%、「ややあてはまる」が45%、合わせて肯定的回答が88%であった。

コロナ禍においても高い肯定的回答率を維持しているのは、創意工夫した「ノート検定」(770チャンネルを含む)、「ミニ検定」、「ワードクイズ」の実施が大きく貢献していると多くの教員が実感している。すべてが「学習協力委員会」の生徒からの提案であり、「生徒会活動」の活性化の大きな成果である。様々な自粛・制限があり、とても生きづらい学校生活を強いられ、途切れても仕方のない状況下で実施した創意工夫した「ノート検定」には、生徒のアイデアがたくさん取り入れられ、決して教員だけでは成し得なかった取組である。

このように、生徒たち自らが「ノート検定」を深化させたことで、どのような状況でも実施が可能という希望を示してくれた。3年間にわたるコロナ禍において、逆境に負けず何事にも前向きに協力して取り組む生徒たちの姿には頭が下がる思いである。

3. まとめ

「ノート検定」開始以前(2015年度まで)の学力の状況は、数年間にわたって、「全国学力・学習状況調査⁽¹⁾」では全国平均を下回り、「学習確認プログラム⁽²⁾」では京都市平均を大きく下回っていた。しかし、「ノート検定」開始から4年後(2019年度)の「全国学力・学習状況調査」では全国平均より4~7ポイント高く、無回答率ではほぼすべての問いで0%であった。また、「学習確認プログラム」の3年生の結果では、京都市平均より10ポイント高い結果が得られ、2020年度以降も平均より高い結果を維持している。これは、7年間にわたって「ノート検定」を中心とした「生徒会活動」の活性化・継続化・定着化の成果であると言っても過言ではない。

また、2019年度開始の小学生の「ノート検定」も2020年度には5年生まで広がったことで、2022年度の新入生にとっては「ノート検定」が3年目を迎えることになり、年々授業に対する主体的・積極的な姿勢・態度の定着化およびノートの取り方・まとめ方の能力の向上に寄与している。さらに、「生徒会」の本部役員改選では、「学習協力委員会」の委員長に立候補する生徒が複数名出てくるようにもなった。そこで、2021年の立候補生徒の立会演説会でのスピーチ(抜粋)を紹介する。

「(略) 私が学習協力委員長になったら、この良い点を取ったときの喜びを少しでも●●中に増やせるよう努力をしたいと思います。例えば、テスト前になったら、ビデオではなく実際に学習協力委員が授業をすることで、その場での質問を可能にし、よりテスト勉強を身近に感じてもらえるようにします。(略)。

私は「生徒の生徒による生徒のために生徒会」を目指します。よりよい学校は、私たち生徒一人一人の手でつくっていくものです。勉強でもそうですが、大事なのは自分からやろうとする気持ちです。共に学習を楽しめる学校をつくっていきましょう。(略)」

コロナ禍が収束することを想定し、学習協力委員が授業するという斬新な取組を提案しており、先を見据えて、活動のさらなる発展を積極的に考えること、学校は生徒一人一人の手でつくっていくもの、そのために主体的・積極的な気持ちが必要であると訴えていることに主権者意識の高さが感じられる。

注

- (1) 文部科学省による学力・学習状況調査
全国の小学6年生，中学3年生全員を対象として行う調査である。2007年度より実施しており，学力を問う出題だけでなく，児童・生徒の学習環境や生活環境のアンケート調査も行っている。
- (2) 京都市教育委員会による学力検査
小・中学校の児童生徒に既習内容を計画的に総復習させ，自ら客観的な学習の定着状況と学ぶべ

き課題を確認させることにより，自学自習の習慣化を促し，学習の改善および一人一人の確かな学力向上に結び付けることを目的として定期的に5教科で実施している。

参考文献

文部科学省（2022）．*生徒指導提要（改訂版）* 東洋館出版

要約

2022年に改訂の「生徒指導提要」（文部科学省，2022）によれば，特別活動の一つである「生徒会活動」は生徒指導の目的を達成するためにとっても重要である。公立中学校で2016年度に始めた「ノート検定」を中心とした生徒会活動は，生徒たちが自ら楽しく学習し合える環境を作り出した。新たに「学習協力委員会」を設置したことで，「ノート検定」が生徒主体の取組となり，生徒会活動の活性化につながった。生徒が提案した企画を生徒自身で運営し，生徒同士で認め合い・励まし合い・支え合える関係をつくっていくことは，生徒の主体性・積極性を大きく促進し，学力の向上にも大いに貢献した。また，2020年度からのコロナ禍において，生徒のアイデアを取り入れた創意工夫した「ノート検定」を実施できたことは，どのような状況でも生徒会の取組は実施可能との希望を生徒たち自らが示した。さらに，生徒会活動に魅力を感じて生徒会役員等に立候補する生徒が増えてきたことは主権者意識の向上と言える。

キーワード：生徒会活動，主体性・積極性，主権者意識